

へたくそな字たち

TOKYO ハンバーグ

言わせて! 今日の芝居

五十文字劇評 No.61

【六〇代】
▼学びたくても学べなかつた時代を経て通う夜間中学の人々。着眼点は素敵。でも登場人物の背景がぼんやりしていて共感しきれない。篠田さんは何に苛立っていたの?天ぷら屋の吉野さん

はどうして孫に勉強を教えたいと思ったの?(親がいるのに?)中国人、韓国人はなぜ登場したの?夜間中学の先生たちの思いもちよつと分かりにくい。雰囲気だけで流された感じが否めない。
(女性)

▼小さな夜間中学の教室が大きな社会の縮図であった。大西弘記の熱いハートにまとも涙腺崩壊。挙手の伏線は見事であった。
(男性)

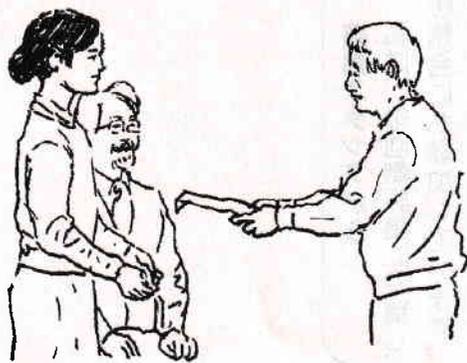
▼高校が夜間だったので、オーバードラップしました。「卒業して、何になるっていうんだよ」の問いが耳に残ります。つらい時に、私も同じことを思いました。
(男性)

▼学びたい。自らの強い意志で夜間中学へ通う。学校演劇的わかりやすさ。教室の黒板とライト。人生の学びの場よ。
(女性)

▼静かな感動を呼ぶ舞台だった。一番印象に残ったのは、最後の場面。亡くなった吉野道郎の手紙が読み上げられ、そのあと畑野先生が語る「教育への思い」。弥生から「綺麗事言ってるんじゃないよ!」と言われ、「うん、綺麗事だね。じゃあ最後の授業をしようか」。そして、最後に「気持ち伝わらない時はどうしたらいい?」「それを...知りたいから...: 学校で学びたい」と結ぶ場面。素晴らしいと思う。「学ぶ」ということの本質的なことが見事に表現されている。これは作者大西弘記の思いでもあるのだろう。畑野先生を中心として、誰かが主人公というよりは、繰り広げられるいくつかのエピソードを通して、出演者皆が時には前に出て後ろにさがるという構成も上手い

と思う。「学ぶ」ということや「自分たちの心地の良い居場所」について、いろいろと考えさせられた舞台だった。
(男性)

【七〇代】
▼一件落着やハッピーエンドは無いけれど、励まし合つて現実に向き合うしかないのだ、と優しく訴えてくる芝居だった。心が暖かくなつた。
(女性)





▼開演からずっと引き込まれた良い芝居でした。大満足。夜間中学に通ってくる人達の生き生きとした姿は友達関係の良さだと思いました。昔はこれが中学校のどこにでもある姿だったなあ。

▼年齢も出自も様々な生徒が通う夜間中学。読み書き、計算ができない悔しさが滲み飛び交うセリフ、手紙を先生に郵送する宿題は心の叫びが語られる。本音でぶつかり合う会話と高い熱量の舞台は客席に一直線に響いた。バレエの試合の演出も圧巻！素晴らしい芝居でした。

▼場面の転換は、すごく良かった。人物達はもう少し焦点をしぼったほうが入りこみやすかった。セリフが少々聞きとりずらかった。

(男性)

▼生徒の年齢・職業がばらばらのせいかな、先生と言うより友達のように見えて、私が思っていた先生像とは見事に違った。遅刻をした時は、授業の妨げにならないようにそっと入って来るのが常識かとも？教える立

場と習う立場での違いが少しあるほうが良かったのでは？全体的にはアットホームで少し涙が出ましたが、効果音が大きすぎるのとセリフが少し聞きづらい部分があったのが残念でした。

(女性)

編集スタッフから

私は、毎回劇評集に投稿し、感想会にも参加しています。そうすると、芝居を観終わってたままにしておくよりも、鮮明に芝居の記憶が残っています。そして、芝居を振り返ることで、その作品が自分にとって、どこが面白くどこが足りなかったのか、より深く見つめ直すことができます。他の会員の方のいろいろな観方・考え方にふれることは、とても意味のあることだと思えます。今回も、より多くの方の投稿をぜひお待ちしております！